

<書評>小笠原賢二著 『終焉からの問い-現代短歌考現学』

青山, 一男

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

51

(開始ページ / Start Page)

170

(終了ページ / End Page)

171

(発行年 / Year)

1995-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019819>

著者がどう考えているかも伝わりにくく、そのためそれらの言葉の内実が弱いのではないか、と思った。

とは言え、労作であることに間違いはなく、

小笠原賢二著

『終焉からの問い』

——現代短歌考現学——

青山 一男

——平和や自由であるゆえに行き暮れてしまつたよるべない感受性は何処へ向おうとしているのか——

と、現代文学にどう向き合うかをテーマに、平成三年、『文学的孤児たちの行方』を書き下した著者が、本書では主として一九八〇年代以降の短歌における感性の変容。歌壇の体質（「現代短歌八つの問題」）家族・青春・老年・が定型詩のなかでどのように表現されているか、（「現代短歌考現学」）を問題意識の中心に据え、短歌の熱心な読者でもあるもう一人の著者自身を同伴しつつ二十世紀の終りの岸辺に立ち、その「重層的終末」（「終焉と拡散の中で」）の諸相を凝縮、解析し、複眼的視座から捉えた論考が鳥瞰図の如く展開されてい

教えられること大であった。

（くろこ かずお・一九八二年博士了）

▽著者——一九七一年卒

る。かつて著者がその著作『異界の祝祭劇』の中で、

「戦後短歌史において、アララギズムに象徴される可視的現実一辺倒の、自然主義リアリズムの短歌観を根底から否定して、不可視の世界」を三十一文字に導入した。」として注目した前衛歌人塚本邦雄の内面にさえ、いま、へ前衛意識の象徴としての虚構的「われ」の衰退を見届けざるを得ないのである。（「作家たち」塚本邦雄と岡井隆——読者論の逆説——）表現という言語意匠を纏う限り、短歌も小説も同じ舞台の上にある。著者は作家や歌人たちを「兩ニラミ」しながらその文脈の舞台上に登場させ、家族・青春・老年・という人間存立の根本形態に照明をあ

て、小島信夫『抱擁家族』安部公房『燃えつきた地図』を浮かび上らせながら、吉本のへ映像的なメディアが知識の根底の無意識の部分にまで完全に入ってきている（『黒衣の文学誌』——吉本隆明との対談——）の言葉と照応するかのようによくの若い歌人たちや・田中康夫・吉本ばなな・島田雅彦・村上龍・ら、若い作家たちに訊問しているのだ。

——近代的な表現は：自我や主体性の神話によつて作品は方向づけられて来た。しかもはや、そうした枠組みは失効した。表現はいま、自我意識や一貫性という重く硬く窮屈なヨロイを脱ぎ捨てて——（「青春」言語明瞭・意味不明・）さて何処へ行こうとしているのかと。これは消費文化の幻想に酔い痴れている時代への一矢でもある。

特権意識にもたれかかることを一貫して拒否して来た著者の、「同義反復という徒勞（統）——禁忌の構造」について——に反論を試みた菱川善夫には、「判断停止」から目醒めて八〇年代以降の新しい「塚本・岡井論」を要望しているが、加藤治郎、鈴木竹志、に対しては著者の十代から長い年月をかけて累積した一人の短歌読者としての眼光と、文芸批評家とし

て練り上げられた論理構成によって裁断してゆく図は格闘技の鮮烈さそのものが、辯証の磁場で展開されている。へ自己消失と救済「千」と「青」のイメージを巡って——のなかで「千」に内包される絶望と再生。「青」に潜む静謐への誘いを救済への喩として捉えているのは、著者のすぐれた詩精神である。中上健次『千

里原昭著

『琉球弧・奄美の戦後精神史』

——アメリカ軍政下の思想・文化の軌跡——

大越 嘉七

敗戦から八年間の厳しいアメリカ軍政下におかれた奄美人の日本復帰と民主化と文化創造の心の歴史を、自らの「戦後思想の体験を再検証」する意図のもと、先人の論考は勿論、当時奄美で出版された雑誌、新聞、機関紙、議事録に至る綿密な調査、さらに関係者の戦後体験の聞き取り（録音採取）等の多くの資料を駆使し、また若き著者の奄美体験をも関わらせて『奄美の戦後精神史』として綴られた実証的な力作である。

戦後民主主義者としての体験を共有する者として共感をもって読んだ学ぶ所の多い著作

年の愉楽』丸山健二『千日の瑠璃』の世界が現代短歌の終末感と重ね合わされて、人間存在における永遠の「喩」としての終焉を問いつける形而上学がここに示されている。

（あおやま かずお・『ぱにあ』同人）

▽ながらみ書房・一九九四年刊

▽著者＝文学部講師

である。いろいろの事に触れたいが紙幅がないので一点に限りたい。関心と呼んだ刺激的な特徴は、著者自身が奄美の、この時代の空気を身をもって体験し、叙述の中に登場していることである。いわば自分史的な「私自身の、戦後奄美史像」である。自分が関わって生きた現代の一時期を、思想史や文学史、あるいは運動史としてではなく、他ならぬ心の歴史「精神史」として歴史化しようとすることは、自らを含めたその行末を見届けることだ。人は死に、時代は変る。この悲哀を伴う感情を、より客観的な認識に転ずるには時間

がかかり、厳しい検証を必要とする。時に存在を賭けた心の痛み（直接関わっている時には必然的に）を伴わざるを得まい。客観性の一つの保障は先ず自分史的なものの排除だが、著者は敢えて真向から挑戦しているのである。昭和精神史の最も鋭い切り口の一つであろう現実に挑む著者の情熱は敬服に値する。『奄美の戦後精神史』の長短・功罪はこの一点に関わっている。

歴史化のための資料の尊重や実証主義は時に叙述を無味乾燥にする危険性をはらむが、それを見事に救っているのは著者の自己に厳しく奄美人の心を大切にしている情熱である。歴史的検証は視野と認識の拡大が不可欠だが、著者は「精神史」としての未成熟を恐れずに自己の「感性」を大切に「八年間」「奄美」に限定し叙述の密度を高めるために情熱を傾ける。「戦後」は過去の日本の意識的否定の過程でもあったが、無意識の肉体において過去を引きずっている奄美の詩人・泉芳朗（奄美大島日本復帰協議会議長・名瀬市長）の皇民意識（「感性」）の残滓に対する鋭い批判は、正鵠を射ているだけに、底には抑制された厳しい自戒の感情が横たわっているように。正に「混沌」とした歴史的現実に真向から挑んだ著者